



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	図書寮本『類聚名義抄』における仏典音義類と辞書類の利用
Author(s)	申, 雄哲
Citation	国語国文研究, 147, 60(1)-47(14)
Issue Date	2015-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93155
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_147_60-47.pdf



図書寮本『類聚名義抄』における 仏典音義類と辞書類の利用

申 雄 哲

はじめに

図書寮本『類聚名義抄』（以下、図書寮本名義抄）は仏教教学上の必要で編纂された部首分類体の辞書である。その材料の多くは慈恩撰『法華音訓』^(註1)、玄応撰『一切経音義』（以下、玄応音義）、中算撰『妙法蓮華経积文』（以下、中算积文）などの仏典音義から採っている^(註2)。単字の掲出語^(註3)を基本とする『説文解字』以来の部首分類体の辞書とは違って、図書寮本名義抄に2字以上の掲出語が多いのは、そのような仏教書を重んじる編纂方針と深く関係する。一方、その注文には空海撰『篆隸万象名義』（以下、万象名義）や切韻系韻書といった、いわば一般辞書の類からの引用も多く取り込んでおり、これまた図書寮本名義抄の編纂の根幹を成している。

本稿では、図書寮本名義抄において仏教書と一般辞書からの編纂材料をどのように利用しているかを検討し、仏典音義を土台に一般辞書へ移行する辞書史の流れの上における本辞書の位置づけについて考察する。

1 図書寮本名義抄の編纂目的と編纂材料

1.1 編纂目的

図書寮本名義抄の編纂材料について述べる前に、その収集と分類の前提となる、編纂目的について考える必要がある。吉田（1955a）は図書寮本名義抄の編纂を仏教教学上の必要による辞書作りと見做し、図書寮本名義抄は「仲算の法華経积文や真興の大般若経音訓の撰述における、堅実該博な訓詁精神の発展が結集したもの」（45頁）であると指摘している。図書寮本名義抄の編纂が目指したこととして、①仏典読誦のための字音の明確化、②法相宗関係の訓詁学における便益、③世俗辞書を越えて百科全書的な仏教事典の作成、④正確で権威的な外典の訓点語の併載、を取り上げている（45～46頁）。

さらに、吉田（1971）は図書寮本名義抄が「弘法大師の『万象名義』をおし進め、仲算の『法華経积文』、真興の『大般若経音訓』などの編修精神の上に立ち、これらを中心に仏典辞書・註書を広く集めて、仏教教学のための字書たらんことを期した」（472頁）のものであると述べ、特に中算积文との関係については「あたかも『积文』の解体延長線上に『名義抄』がある観がする」（464頁）と指摘している。

宮澤（1977）は、吉田氏の指摘を受けて中算釈文の注文が図書寮本名義抄でどのように扱われているかを検討している。その結果、図書寮本名義抄の編纂において、内典釈（仏典音義や注釈書などの釈義、筆者注）と外典釈（内典釈以外の字書や韻書などの釈義、筆者注）とが重なり合う注文に対しては、前者を優先して採用する方針が察知されることを指摘している^(註4)。このように内典釈、つまり仏教界の先行文献からの材料を重んじる編纂態度は、仏教教学上の必要による辞書作りという編纂動機および目的とも整合するものとして理解できる。

1.2 編纂材料の利用先と出典

図書寮本名義抄の各項目は掲出語と注文で成り立つ。本辞書における編纂材料の利用の様相は、各項目を構成する二つの利用先、つまり、掲出語と注文とに分けて見ることができる。

掲出語がどのような出典を持つかについては、掲出語そのものだけで知れることは限られるが、単字の掲出語と二字以上（以下、複数字）の掲出語といった構成字数による形態的な分類によって分析の手がかりを模索する。図書寮本名義抄は部首分類体の辞書であり、部首という分類は字形という個別漢字の固有特徴から見出した共通分母である。字形という固有特徴は単字レベルのものであり、それは『説文解字』や『玉篇』などの部首分類体の辞書が単字の掲出語を取る所以である。ところが、図書寮本名義抄の場合、部首分類体に適しているとは言い難い複数字の掲出語が多い。その多くが仏典音義類を出典とする仏典の字句であることは先行研究によって明らかにされているところである^(註5)。

注文に対しては、その出典注記を基に編纂材料の出処が明らかにされている。吉田氏は「図書寮本類聚名義抄出典攷」^(註6)で図書寮本名義抄の出典を（甲）内典関係（仏教関係図書、67点）、（乙）外典関係（それ以外の漢籍、36点）、（丙）訓点本関係（27点）、の三種類に大別した上で^(註7)、各出典文献について詳しく考証している。各出典の引用頻度については、橋本（1951）、吉田（1954a・1954b・1955b）、宮澤（1977）、池田（2000）などが集計を出している。引用頻度上位のものとしては、玄応音義・玉篇・万象名義・真興音訓・倭名抄・東宮切韻・中算釈文・慈恩撰書、の八種類の出典（以下、主要八出典）が取り上げられ、内典を中心に外典の利用も少なくないことが窺われる。

以下の検討では、内典関係の出典を「仏典音義類」、外典関係の字書および韻書類を「辞書類」と呼ぶことにする。訓点本関係の出典に関しては、仏典音義類および辞書類とは辞書編纂における取り扱いが質的に異なるものと捉え、本稿の議論では取り上げない。

2 編纂材料の基本的な特徴

2.1 仏典音義類

図書寮本名義抄の編纂が有する仏教教学的な狙いを考えると、すでに仏教教学的な

目的に合わせて加工された材料として、個別經典の字句に対する解説と訓詁を兼ねた
仏典音義の利用は効率的な手法であったろう。特に法相宗関係と、法華經關係の注釈
書とが圧倒的に多く、ほとんど法相宗教學に關係しないものはない、といった状況^(註8)
はその材料利用の一貫した方針を示すものである。圖書寮本名義抄の注文における引
用頻度の現況を見ても上位を占める典籍として多数の仏典音義類が上がり、池田
(2000)の集計によると、最も引用頻度が高い典籍として、玄応音義(1314条)、真興
音訓(678条)、中算釈文(360条)、慈恩撰書(334条)があげられる。

ここでは引用頻度の高い上記の4書を対象に取り上げ、仏典音義類の基本的な特徴
を概説する。但し、真興音訓は現存しないため外し、慈恩撰書はその中核をなす法華
音訓のみ取り上げることにする。法華音訓、中算釈文はいずれも鳩摩羅什訳『妙法蓮
華經』(以下、法華經)の音義書であり、玄応音義の巻六にもそれに対応する音義が収
載されている。法華經の冒頭の經文と、それに対応する各音義の掲出語を順番に記す
と次のようである。(經文および句読点は大正藏による)

【法華經】如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿
羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。逮得已利盡諸有結。心得自在。其名曰阿若憍陳如。

【玄応音義】耆闍崛山／無復／逮得

【法華音訓】佛／耆闍崛山／比丘／無復／逮得／阿若憍陳如

【中算釈文】如／是／我／聞／時／佛／住／王／舍／城／耆／闍／崛／山／中／
與／大／比／丘／衆／萬／二／千／人／俱／阿／羅／漢／諸／漏／已／盡／
無／復／煩／惱／逮／得／已／利／有／結／心／自／在／其／名／曰／阿若／
憍／陳／如

㊦項目の配列基準は対象經典における字句の出現順による。

㊧掲出語の形態は、まず、玄応音義と法華音訓はほとんど複数字掲出である。複数
字の場合「耆闍崛山」や「比丘」のような熟語も見えるが、「無復」のように熟語とは
言い難いものも含まれる。一方、中算釈文のほうは、単字掲出が多く、対応する經文
のほとんどの字を掲出している。

㊨注文の内容は、熟語、特に仏教用語についての事典的な説明と、単字に対する辞
書的な説明に分けられる。前者は仏典理解のための参考書としての特殊性が著しく、
後者は先述した辞書類からの影響が見られる。

2.2 辞書類

圖書寮本名義抄には、原本『玉篇』(以下、原本玉篇)、『大広益会玉篇』(以下、宋
本玉篇)、『篆隸万象名義』(以下、万象名義)、『東宮切韻』、『蔣飴切韻』など、玉篇系
字書と切韻系韻書の引用が多く見られる。このような字書と韻書の類は、古籍の訓詁
などを土台にして発展した中国言語学の集約である。圖書寮本名義抄の編纂が目指す
「仏典読誦のための字音の明確化」や「法相宗關係の訓詁学における便益」を達成する
ために、中国語の音韻学や訓詁学の成果を基に編まれた字書と韻書の利用は必須的で
あったろう。

特に同じく部首分類体である玉篇系字書は、部首の選定や部首内における項目配列

といった辞書編纂の構造的な側面の模範となった^(註9)。その中でも万象名義の引用頻度は出典注記「弘」に限っても第4位にのぼるほどである^(註10)。以下、万象名義を例にして、部首分類体辞書の形態と内容的な特徴を概観する。

⑦項目の配列基準は、部首分類体、すなわち、漢字一字が有する「形」の特徴に基づく。すなわち、各漢字は「部首」という字形上の共通分母によって分類され、さらに各部首内では主に字形上の類似性あるいは意味上の連関などによって並べられる。いずれにしても一字の漢字が持つ固有の特徴によるものである。

⑧掲出語の形態は、上述した配列・分類の基準に合わせて、その掲出語は単字を基本とする。たとえば万象名義の心部の冒頭を見ると、「心―息―情―性―意―指―恵…」のように単字の掲出語が連なる。同じく部首分類体を標榜する図書寮本名義抄の編纂材料としても適合度が高い。

⑨注文の内容は、単字に対する字音と意味を中心とする訓詁的な説明である。たとえば、「心」の例を見ると、「胥林反」のような反切による字音注と、「神也容也」のような「○也」体の意味注が収録されている。これは仏典理解の土台として字句の理解と読誦音の確定を求めた図書寮本名義抄の編纂目的にも符合するものである。

2.3 小結

以上で述べた図書寮本名義抄の材料となった主要な仏典音義類と辞書類の特徴を対比すると次の【表1】のようになる。

【表1】 仏典音義類と辞書類の対比

	仏典音義類	辞書類
⑦項目配列	経典出現順	字形基準
⑧掲出語形態	複数字・単字	単字
⑨注文内容	訓詁的な説明／特殊用語の説明	訓詁的な説明
編纂上の利点	仏典理解と仏教要語に最適な材料	部首分類体に最適な単位
編纂上の難点	部首分類体の基準適用が困難	部首立てと部首配属の相違

ところが、仏典音義類の注文、特に訓詁的な説明の内容は、辞書類の注文と根本的な相違があるわけではない。吉田(1955c:36)は辞書類と仏典音義類に対して、両者の基本材料における同質性と相互参照を指摘している。仏典音義類を中心材料にして、部首分類体の辞書を作ることを可能にした土台である。

3 掲出語における編纂材料

3.1 掲出語の形態

仏典音義類からの材料を部首分類体辞書に適用する上で問題があり得る。次はどのような困難が窺える例である。

唯識【慈云唯謂簡別、遮無外境。識謂能了、詮有內心。・章有十門。釋名如第二門。】

<072-74>^(E11)

この項目の注文は慈恩撰書の一つ『成唯識論述記』から採られ^(E12)、掲出語「唯識」も同書からのものと考えられる^(E13)。その注文には単字「唯」と「識」に対する部分と、熟語「唯識」についての部分とが混在する。このような項目を部首分類体に分類配列するばあい、単字「唯」と「識」のどちらを基準にするかという問題に辿り着くわけである。上掲の項目のばあい、現存する部分の限りでは「識」の部首に従い、言部に配属されている。しかし、図書寮本名義抄が零本であることを考えると、「唯」に従って今は伝わらない口部にも同語が収録されていた可能性も十分ある。実際、「恒沙」のばあいは次のように「恒」と「沙」両方に従って水部 (<027-41>) と心部 (<251-62>) にそれぞれ収録する。

恒沙【慈云梵伽河神名。河從神稱。見歹部】<027-41>

恒沙【中云胡登反・慈云梵伽河神名。河從神稱。此河具五義諸經多寄爲喻。】

<251-62>

熟語の掲出語を持つ材料を部首分類体に並べ直すことの難しさが推し量られる。

【表2】は図書寮本名義抄の現存部

分における掲出語の形態的な分類を部首ごとに示したものである。単字の掲出語を採るばあい（単字）と、2字以上の掲出語を採るばあい（複数字）に分けた結果で、いずれの部首でも複数字のほうが単字を2倍以上上回り、大きな格差が確認される。複数字の掲出語は、全体3675項目^(E14)のおよそ4分の3に近い2727例にのぼり、単字を採る例は4分の1ぐらいに過ぎない。

部首ごとに見ると、讠・足・豆・邑・阜部で複数字の割合が平均よりやや高い。最も割合が高い阜部のばあいは、「阿弥陀・阿羅漢・阿闍梨・佛陀」などの梵語訳語に頻用される「阿」「陀」などが含まれることが原因と考えられ、足・邑部に対しても同じことがいえる。

それに対して、単字掲出語が比較的が多い部首としてはト・山・石・土部があるが、いずれの部首も具体的な物名を単字で表すものが多いように見受けられる。

【表2】図書寮本名義抄の各部首と掲出語の形態

部首	頁 ^(E)	項目	単字	複数字
水	61	664	174(26%)	490(74%)
讠	5	57	11(19%)	46(81%)
言	32	349	86(25%)	263(75%)
足	20	216	45(21%)	171(79%)
立	6	54	14(26%)	40(74%)
豆	3	34	7(21%)	27(79%)
ト	5	64	19(30%)	45(70%)
山	11	126	45(36%)	81(64%)
石	11	135	46(34%)	89(66%)
玉	13	140	38(27%)	102(73%)
邑	15	151	29(19%)	122(81%)
阜	26	250	46(18%)	204(82%)
土	23	262	81(31%)	181(69%)
心	41	456	115(25%)	341(75%)
巾	10	104	29(28%)	75(72%)
糸	40	415	107(26%)	308(74%)
衣	18	198	56(28%)	142(72%)
合計	340	3675	948(26%)	2727(74%)

注：勉誠社覆製本(1969年刊)の頁による

3.2 掲出語の内容

3.2.1 複数字掲出語の分類

複数字の掲出語を詳しく検討すると、その中には次のようなパリエーションの存在が確認される。

(1)訓詁【應云吁運反一導也教也誠也・中云誨也・眞云言一也試也・東云赦也注解也以善言一男女也。又男曰教女曰一也。議也從也。ヲシフ詩・下音故・弘云釋一也・應云又音古訓古言也訓導也釋也・東云古今異辭訓古言又姑戸反俗音古非訓也故古也。】〈076-62〉

(2)大豆【順云一名菽〈音叔〉和名万米】〈128-12〉

(3)阿彌陀【應云此言無量壽・慈曰一彌多那庾沙云無量壽。】〈186-43〉

(4)慈氏【域曰梅呬麗邪唐言慈即姓也舊曰彌勒訛略 慈云梵云梅呬麗耶古云彌帝麗或彌勒皆訛略也】〈269-32〉

(5)況況【干云上俗・中云許訪反矧也。捷云寒冰也。今案非文意。】〈068-24〉

まず、(1)と(2)は漢語熟語で、複数字の掲出語の中で最も多い割合を占めるものである。それぞれの注文を見ると、(1)には熟語を構成する単字「訓」「詁」に関する漢文注と和訓、(2)には熟語「大豆」に当たる和訓が引用されている。注文は辞書的な説明が中心で、仏教色は特に感知されない。そして、(3)と(4)は梵語の音訳および意識語で(以下、梵語訳語)、仏教伝来と仏典漢訳によって登場した語である。その注文には他の音訳表記や意識といった翻訳関連情報が見られ、仏教色の濃い内容となっている。最後に、(5)の掲出語は、異体関係にある二つの文字を取り合わせたもので、実質的に一文字の複数の字体を示しているため、熟語というよりは単字に近い性格を帯びる。

以上、複数字掲出語は、漢語熟語 ((1)(2))・梵語訳語 ((3)(4))・字体掲出 ((5)) の三種類に分類可能である。そして、字体掲出のばあいは実質的に単字に近い性質を持ち、他の二種類とは取り扱いを異にする必要がある。以上に従って、各部首の複数字掲出語を三種類に分類してみると【表3】のとおりである。

どの部首でも漢語熟語の割合が高いことは共通する特徴で、複数字掲出語の全 2727 項目のうち、76%が漢語熟語の掲出語と分類される。図書寮本名義抄を生み出した仏教教学の世界が、漢訳仏典を中心とした漢字・漢文による文献によって支

【表3】複数字掲出語の細部分類

部首	漢語熟語	梵語訳語	字体掲出	計
水	386(79%)	84(17%)	20(4%)	490
彳	28(61%)	1(2%)	17(37%)	46
言	206(78%)	51(19%)	6(2%)	263
足	127(74%)	42(25%)	2(1%)	171
立	35(88%)	3(8%)	2(5%)	40
豆	26(96%)	1(4%)	0(0%)	27
卜	43(96%)	1(2%)	1(2%)	45
山	65(80%)	11(14%)	5(6%)	81
石	85(96%)	1(1%)	3(3%)	89
玉	86(84%)	14(14%)	2(2%)	102
邑	42(34%)	76(62%)	4(3%)	122
阜	99(49%)	98(48%)	7(3%)	204
土	131(72%)	37(20%)	13(7%)	181
心	286(84%)	37(11%)	18(5%)	341
巾	66(88%)	6(8%)	3(4%)	75
糸	265(86%)	36(12%)	7(2%)	308
衣	109(77%)	20(14%)	13(9%)	142
合計	2085(76%)	519(19%)	123(5%)	2727

えられていたことに照らすと穏当な結果であろう。一方、各部首における梵語訳語と字体掲出の分布のばらつきは注目に値する特徴といえよう。以下、各分類について詳細に検討する。

3.2.2 漢語熟語

【表3】に示された各分類における分布を見ると、豆・ト・石・巾部は相対的に漢語熟語の割合が高い。特に豆部には漢語熟語に分類された掲出語の中に、「大豆」「烏豆」「鷓豆」「珂孚豆」などといった豆の種類を表す物名が連なる。豆部内の全34項目のうち、複数字掲出語を持つ項目は27例で、その中、22例が様々な豆の名称で、結果的には物名集のようなものになっている。さらにその中の12項目は倭名抄からの万葉仮名和訓のみで、漢文注中心の項目が多い図書寮本名義抄の中では異例ともいえる項目が集中している。

同じような様相は石部においても見られ、「石鐘乳」「慈石」「玄石」といった「石」関係の物名が続く。各項目の注文は倭名抄や『文選』などから収録された万葉仮名・片仮名和訓が中心で、掲出語も倭名抄に存在するものが多い。

3.2.3 梵語訳語

梵語訳語のばあい、水・言・足・邑・阜・土・心・糸・衣部に集中している。特に邑部では漢語熟語の2倍近く、阜部は漢語熟語と梵語熟語とがほぼ同じ割合を占め、全体的に漢語熟語が多数を占める中で特殊な様相を呈する。邑部と阜部の梵語訳語掲出語に含まれる字^(註15)の主要なものとしては次のような字がある。

○邑部：那、邪、耶、鄔、部、郁、邠、郵、郅

○阜部：阿、陀

邑部の「那・邪・耶・鄔」の4字、阜部の「阿・陀」の僅か2字に多数の掲出語が集中している。他に梵語訳語が多く分布する部首を見ると、水部の「波・洛・泥・沙・須」、言部の「訶・譚・諾・謬・讖」、足部では「跋」、玉部の「璃・珊」、土部の「坻」、心部の「怛・憍・侈」といった梵語音訳語に頻用される字に同様の集中が見られる。

一方、山部の「山」、土部の「城」、衣部の「衣」は、西域の地名や物名などの意識に現れる用字である。これらの掲出語は仏典音義類などを出自とするとしか考えられないものである^(註16)。梵語訳語掲出語は図書寮本名義抄の掲出語採録における仏典音義類の影響を示す一つの指標といえる。

3.2.4 字体掲出

もう一つ、字体掲出に関しては、水・彳・土・心・衣部に集中する。特に彳部では僅か46項目の複数字掲出語のうち、17項目が字体掲出である。その字体掲出語は次のとおりである。

氷氷、決決、凍凍、淩淩、馮馮、漸漸、涼涼、冷冷、準準、沃沃、潔潔、彫彫、馮馮、減減、減減、況況、將將

「將將」を除く16例は、いずれも「彳」と「亍」の微細な違いによる類形別字・異形同字の混同を弁別するためのものである。これは彳部が抱える字形上の問題に起因する現象である。そして、「將將」以外の項目には『干祿字書』からの引文を収録し、その掲出語も同書から採られたと思しきものである。これらの項目からは、その掲出

語の出自と注文の内容を見る限りでは仏教色は特に看取されない。

3.3 小結

以上、掲出語に関して、単字と複数字といった形態的分類を行った。複数字掲出語に対してはさらにその性質によって、漢語熟語・梵語訳語・字体掲出の3種に分けて検討した。字体掲出は熟語である他の2種類と違って単字掲出語に近い性質を持ち、それに準ずるものとして分類するのが妥当であろう。そうすると、図書寮本名義抄の掲出語は、単字および字体掲出と、漢語熟語および梵語訳語とに括ることができる。前者を「一字掲出語」、後者を「熟語掲出語」と呼ぶことにする。

4 注文における編集材料

4.1 注文の出典注記

図書寮本名義抄の注文には引用出典の注記が施され、それを基に本辞書の編集における出典利用の実態を掴むことが可能である。橋本（1951）と池田（2001）といった図書寮本名義抄の出典索引、吉田（1954a・1954b・1955b）の出典考証を手がかりにして、図書寮本名義抄の出典注記について検討すると次のようである。

図書寮本名義抄の現存部分の3675項目において7084条の出典注記（間接注記を除く）があり、出典特定が困難な10条を除くと、7074条である。その内訳は、仏典音義類3306条、辞書類3157条、訓点本611条である。さらに全3675項目における仏典音義類と辞書類の引用状況を見ると、仏典音義類を含む項目（A+B）は2406項で65%、辞書類を含む項目（A+C）は1717項で47%を占める。そのうち、仏典音義類と辞書類をともに引用している項目（A）は946項で26%を占める。すなわち、仏典音義類または辞書類の引用文を含む項目は全体項目の86%にのぼり、両者が図書寮本名義抄の根幹を成していることが改めて確認される。

【表4】 仏典音義類と辞書類を引用する項目の対応

	仏典音義類引用○	仏典音義類引用×
辞書類引用○	946(A)	771(C)
辞書類引用×	1460(B)	494(D)

両者の重なり合いについて見ると、【表4】のようである。仏典音義類を含む項目の場合、辞書類を収録しない項目（B：1460項）は、共に収録する項目（A：946項）より多い。それに対して、辞書類を含む項目では、仏典音義類を収録しない項目（C：771項）が共に収録する項目（A：946項）を下回る。そして、仏典音義類を引用するが辞書類は引用しない項目の数（B：1460項）は、辞書類を引用するが仏典音義類を引用しない項目（C：771項）の2倍近くとなり、仏典音義類のほうが根幹的な材料として優先され、広く分布していることが分かる。

これは、池田（1991b：15）の「玄応音義によって提出項と注文を採録した後、注文

は玄応音義より篆隸万象名義を優先するという出典の採録序列に従って篆隸万象名義から注文を増訂して行く方針」という指摘とも相通じる傾向として理解される。

4.2 掲出語類型との関連

4.2.1 出典分類からの検討

上述した仏典音義類および辞書類の分布と、掲出語の類型との対応関係について検討する。注文の編纂材料と掲出語の類型との対応関係を【表5】にまとめた。主に仏典音義類からの採録が多く目立つ「熟語掲出語」と、そうではない「一字掲出語」とに分けて記した。

【表5】注文出典と掲出語類型の対応

	一 字		熟 語		計
	単 字	字体掲出	漢語熟語	梵語訳語	
①音義○辞書×	110(12%)	3(2%)	900(43%)	447(86%)	1460
②音義○辞書○	256(27%)	21(17%)	647(31%)	22(4%)	946
③音義×辞書○	467(49%)	97(79%)	204(10%)	7(1%)	771
④音義×辞書×	115(12%)	2(2%)	334(16%)	43(9%)	494
合 計	948	123	2085	519	3675

注：仏典音義類は「音義」、辞書類は「辞書」と略

まず、出典分類の観点からこの表を読み解くと次のようである。仏典音義類から注文を引いている2406項目(①+②)のうち、一字掲出語は390項目で1割強に過ぎず、9割近くが熟語掲出語である。それに対して、辞書類の注文を引用する1717項目(②+③)においては、一字掲出語(880項目)と熟語掲出語(841項目)とが対等な割合で分布する。しかし、これは、全体的に熟語掲出語(約7割)のほうが一字掲出語(約3割)を2倍以上圧倒していることを考えると、一字掲出語の割合が高いと言わなければならない。つまり、仏典音義類からの材料は熟語掲出語に、辞書類からの材料は一字掲出語に、それぞれ集中して分布するという分析が可能である。

さらに、仏典音義類のみ(①)と辞書類のみ(③)の項目に限って、掲出語類型との対応を検討すると、偏重の傾向は一層著しくなる。仏典音義の材料を引用するが辞書類は用いない項目(①)の場合、一字掲出語と熟語掲出語が占める割合は8%と92%で格差はさらに開く。それに対して辞書類の注文を採るが仏典音義類の注文は採らない項目(③)では、一字掲出語が69%、熟語掲出語が31%を占める。つまり、〈仏典音義類—熟語掲出語〉〈辞書類—一字掲出語〉といった相関関係を見出すことができるわけである。

4.2.2 掲出語類型からの検討

【表5】を掲出語類型から読み解いてみると、次のとおりである。単字掲出語のばあい、全948項目の半分が辞書類のみ(③：467項目)に集中し、共存(②：256項目)と音義類のみ(①：110項目)とを圧倒する。辞書類のみ引用する項目の実例は、次のように万象名義をはじめとする字音・意味の注を併せて持つ辞書からの引用が主なも

のである。

譚【弘云徒耽反着也詭也誕也。・東云國也。又《上》。・季云之豆加爾須】〈080-63〉
一方、音義類のみ引用する単字掲出語の中には、次のような項目が多数見られる。

洫【金類云二古】〈004-62〉

注【類云俗法今】〈004-63〉

これはいずれも「法」の異体字を掲げ、字体掲出語と類似した項目であり、単字掲出語の典型的な形態とは言い難い特殊なものである。注文の出典注記として「類」が見え、郭逵撰『一切経類音決』の引用であることが分かる。この書は音注と字体注を中心とする仏典音義類で^(註17)、玄応音義・中算釈文のような卷音義とは違って、字様書のような性格を併せて持つ、仏典音義類の中でも特殊な部類である。

字体掲出語では辞書類(③)への偏重がさらに著しくなり、79%の分布を見せる。仏典音義類のみの分布は次に示す僅か3例に過ぎない。

洫灋【類云二正】〈004-61〉

源源源【又云三谷】〈005-34〉

莽莽【又云二谷水上浮萍。】〈058-31〉

続いて、漢語熟語の例では、仏典音義のみ引用する項目(①:900)と、仏典音義と辞書類を両方引用する項目(②:647)とを合わせた、仏典音義類を含む項目が74%を占める。一方、辞書類のみの項目(③:204)は10%ぐらいに留まる。辞書類のみの項目は次に示す一連の項目のようなものが特徴的である。

天河【順云一名天漢。和～在下】〈007-11〉

漢河【又云天河一名一】〈007-12〉

銀河【又云天河一名一和名阿麻乃賀波】〈007-13〉

半天河【又云和名岐乃字豆保乃美都竹籬頭水】〈007-14〉

これらはいずれも倭名抄に載る語とその万葉仮名和訓を引用した項目である。万象名義で代表されるような辞書類の典型的な材料とはやや違う材料を含む項目が多い。

梵語訳語になると、仏典音義類のみの項目(①:447)に集中する傾向が一層強い。これは掲出語の属性を考えると理解が難しくないが、辞書類と共存(②:22)、または辞書のみの(③:7)もわずかに存在する。次の例は、梵語訳語の説明の中、音訳に用いられた漢字の字義と字音を解く内容である。

緊那羅【慈云居忍反一捺洛云歌神・中云台云疑神。似人而有一角。《吉同》・玉云糾也急也。眞云キン】〈322-32〉

4.3 小結

以上の検討で、注文の出典と掲出語の類型との対応における傾向を確認した。仏典音義類からの材料を引用する項目は熟語掲出語を採るものに偏り、一字掲出語の場合は辞書類の材料を用いる項目が多い。つまり、注文の出典と掲出語の類型との間には〈仏典音義類材料—熟語掲出語〉〈辞書類材料—一字掲出語〉という対応の傾向が看取される。特に一字掲出語における辞書類材料の集中は、一般辞書への改編を可能にした萌芽的な要素として注目に値する。

5 おわりに

以上、本稿では図書寮本名義抄における編纂材料の利用実態について分析してみた。最初に「仏典音義類」と「辞書類」という編纂材料の出典による分類を行った。続いて、それぞれの材料が「掲出語」と「注文」という辞書内の利用先においてどのような分布の傾向を示すかを計量的に調べた。出典の追究に限界があると考えられる掲出語に対しては、その形態と内容によって「熟語掲出語」と「一字掲出語」といった分類を行うにとどめた。出典注記によって出典が明示されている注文に対しては、編纂材料の使用実態を明らかにすることが容易である。注文における仏典音義類と辞書類の利用状況と、掲出語の類型および内容との対応を調べた。その結果、仏典音義類から採られた注文は主に熟語掲出語を中心に使われ、一字掲出語においては辞書類の利用が集中していることを明らかになった。

本稿での考察は、図書寮本名義抄の編纂目的に照らして予想される仏典音義類を重んじる引用態度を計量的な方法で確認するとともに、一般辞書への萌芽的な要素といえる辞書類の利用の実態を確認したことにより、図書寮本名義抄が持つ辞書史上の位置づけを再確認したという意義を持つ。

注

- (1) 本稿では『法華音訓』を含め、慈恩撰述の仏典音義注釈類を合わせて「慈恩撰書」と呼ぶことにする。
- (2) 慈恩撰書との関係については池田証壽・小助川貞次・淺田雅志・宮澤俊雅（1988）「法華釋文竝類聚名義抄引慈恩釋對照表」（『北大國語學講座二十周年記念論輯辭書・音義』、汲古書院）に詳しい。玄応音義との関係については原・山本（1983）と池田（1991a・1991b・1992）に詳しく論じられている。以上の論考によると、図書寮本名義抄の掲出語の多くは仏典音義類から採り入れられたもので、特に玄応音義からのものはその根幹をなすといえるほど多い。山本（1993）によると、これら掲出語は主に瑜伽師地論・法華經・大般若經の本文に現れる字句が中心とする。これらは法相宗の所依經典というべきものである。
- (3) 本論ではその構成文字数にかかわらず「掲出語」の語を用いることにする。ただし、単字であるばあい、必要に応じて「掲出字」の語を使うことがあるが、文字数以外の違いはないことを断っておく。
- (4) 原本玉篇の抄略である万象名義は、弘法大師の撰書であることから内典釈として扱われたようであるとも述べている。しかし、これは出典利用上の序列上の扱いが内典並みに高かったという意味であり、文献の形態の面では他の内典釈とは一線を画すとしなければならない。吉田氏の「図書寮本類聚名義抄出典攷」（後述）においても万象名義は外典として分類されている。
- (5) 原・山本（1983）は卜部・邑部までの492の対象項目に対して、玄応音義との掲

出語および注文の対応を類型化し、そのうち玄応音義で同一またはそれに準ずる掲出語と注文が 456 項目 (93%) にのぼることを確認している。これは部分的な検討による論究であるが、池田証壽氏は図書寮本名義抄の全体に及ぶ検討を行って「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表」(池田 1991a・1992)を作成した上で、「名義抄所引の玄応音義全体にも妥当するといつてよい(池田 1991b: 18)」と付言する。

山本 (1993) は玄応音義から採り入れられた掲出語に関して、法華經・大般若經・成唯識論とともに瑜伽師地論の字句が重視されていることを指摘する。山本 (1992) は慈恩撰書・玄応音義・中算釈文・真興撰『大般若經音訓』(以下、真興音訓)といった仏典音義類からその掲出語の採録にも序列があることを指摘している。

- (6) 上 (吉田 1954a)・中 (吉田 1954b)・下一 (吉田 1955b) で構成される。吉田氏の著書『古辞書と国語』(2013 年刊、臨川書店) の第 1 部第二章「図書寮本類聚名義抄出典攷」として加筆再収しているものを参照した。
- (7) 吉田 (1955a: 43~44)。具体的な書目も列挙している。
- (8) 吉田 (1955a: 44)。
- (9) 玉篇系字書からの影響の実証的な研究としては、宮澤俊雅(1973)「図書寮本類聚名義抄に見える篆隸万象名義について」(『訓点語と訓点資料』第 52 輯)、宮澤 (1987)「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義」(『訓点語と訓点資料』第 77 輯)、池田 (1993a)「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について」(『人文科学論集』27 号、信州大学人文学部)、池田 (1993b)「図書寮本類聚名義抄の単字字書的性格」(『国語国文研究』94 号、北海道大学国語国文学会) がある。宮澤氏の研究では図書寮本名義抄の注文出典として万象名義の利用が「空海原撰部」と「後人統撰部」とに分けられることを指摘し、注文における位置づけを精査している。それに対して、池田氏の論考では、図書寮本名義抄の字順に対する万象名義の影響を検討している。
- (10) 先掲の宮澤 (1973) は図書寮本名義抄における出典注記「弘」と「玉」が、万象名義の「空海原撰部」(第一~四帖)と「後人統撰部」(第五・六帖)からの引用であると指摘する。しかし、出典注記「玉」に対しては他の典籍からと考えられる注文も含まれる。
- (11) 以下、図書寮本名義抄の所在情報は、複製本の「頁数 (3 桁) - 行数 (1 桁) 段数 (1 桁)」で示す。
- (12) 注 2 の池田ほか (1988: 408) を参照。
- (13) 『成唯識論述記』は仏典注釈書であり、卷音義のような掲出語と注文の明確な区別は視覚的に目立たないが、注釈の対象語句は特定可能である。
- (14) 図書寮本名義抄の全項目数は、項目の認め方によって出入りがあるが、本稿では稿者の認定基準によって数えたものを基準とする。
- (15) 当該掲出語の部首配属を決めるキーとなった字に限る。
- (16) 梵語訳語を掲出語とする 519 項目のうち、一つの出典注記しか見られない 323 項

目は、すべて仏典音義類からのものである。玄応音義 (211 項目) が最も多く、大唐西域記 (39 項目)、信行撰書 (32 項目)、慈恩撰書 (22 項目)、真興音義 (12 項目) の順である。

- (17) 散逸文献であるが、池田証壽 (1995) 「図書寮本類聚名義抄と類音決」(『訓点語と訓点資料』第 96 輯) はこの資料を「字様の形式を持つ字書体の一切経の音義書」として位置づける。

参考文献

- 池田証壽 (1991a) 「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表 (上)」『人文科学論集』25 号、信州大学人文学部
- 池田証壽 (1991b) 「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」『国語国文研究』88 号、北海道大学国語国文学会
- 池田証壽 (1992) 「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表 (下)」『人文科学論集』26 号、信州大学人文学部
- 池田証壽 (2000) 「図書寮本類聚名義抄出典略注」『古辞書と JIS 漢字』第 3 号、池田証壽編
- 池田証壽 (2001) 「図書寮本類聚名義抄出典索引」『古辞書と JIS 漢字』第 4 号、池田証壽編
- 橋本不美男 (1950) 「図書寮本類聚名義抄解説」『図書寮本類聚名義抄』、宮内庁書陵部
- 橋本不美男 (1951) 「図書寮本類聚名義抄出典索引」『書陵部紀要』第 1 号、宮内庁書陵部
- 宮澤俊雅 (1977) 「図書寮本類聚名義抄と妙法蓮華経釈文」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』、明治書院
- 山本秀人 (1992) 「図書寮本類聚名義抄における標出語の採録法について——注文の出典との関連を視点に——」『小林芳規博士退官記念国語学論集』、汲古書院
- 山本秀人 (1993) 「図書寮本類聚名義抄における玄応一切経音義の標出語の攝取法について」『鎌倉時代語研究』16 輯、鎌倉時代語研究会
- 吉田金彦 (1954a) 「図書寮本類聚名義抄出典攷 (上)」『訓点語と訓点資料』第 2 輯、訓点語学会
- 吉田金彦 (1954b) 「図書寮本類聚名義抄出典攷 (中)」『訓点語と訓点資料』第 3 輯、訓点語学会
- 吉田金彦 (1955a) 「類聚名義抄小論」『国語国文』第 24 卷第 3 号、京都大学文学部国語学国文学研究室
- 吉田金彦 (1955b) 「図書寮本類聚名義抄出典攷 (下一)」『訓点語と訓点資料』第 5 輯、訓点語学会
- 吉田金彦 (1955c) 「国語学における古辞書研究の立場——音義と辞書史」『国語学』第 23 号、国語学会
- 吉田金彦 (1971) 「辞書の歴史」『講座国語史 3 語彙史』、大修館書店

使用テキスト

図書寮本名義抄：『図書寮本類聚名義抄』（宮内庁書陵部解説、勉誠社、1969年）

玄応音義：『一切經音義 外12部』（玄應撰、高麗大藏經 第32卷、東國大學校譯經院、1975年）

法華音訓：『一切經音義』（慧琳撰）卷第27所収（高麗大藏經 第42卷、東國大學校譯經院、1976年）

中算積文：『妙法蓮華經釋文』（古辭書音義集成4、汲古書院、1979年）

万象名義：『高山寺古辭書資料第一』（高山寺資料叢書第六冊、東京大學出版會、1977年）

（しん うんちよる・日本學術振興會外国人特別研究員）